巻　頭　言

日本鉄鋼協会の 50 周年記念事業

石　原　善　雄*

20 世紀は人類文化の上に大きな文化を齎した．半世紀を経た今日，文化科学の進歩は極めて急速であつて，今や世界はジエット時代を超えて，ミサイルから更にロケット時代と大きく踏み込んだのである．この間に鉄鋼製造の学術的，技術的進歩も目覚しかつた．LD 法，平炉及電気炉の酸素製鋼，ロータ法，カルド法，ストラ粉末製鋼法，真空熔解法，真空鋳造法，連続鋳造法，ゼンヂミヤロール，新たな熱間押出法(ユージン，セヂュルネー法)等革新的な方法が現出した．

わが国においては，第二次世界戦争中および終戦後，数カ年間の空白があつたが第1次及び第2次合理化計画が樹てられ，設備の合理化と技術改善との結果，わが国としては，目覚しい進歩の足蹟を印している．然しまだ解決せられぬまま残された問題が少くない．これを解決するため鉄鋼生産に当る者は，今時の不況に遭遇しながらも不撓不屈 (1) 過当な競争を排除して，業界が自主的に協調体制を確立し，ひいてはその為に独禁法の改善 (2) 国際競争力を培養するためコスト引下げを強行する．これがため第2次合理化と拡充計画とを遅滞なく遂行する (3) 原料対策の推進—特に東南アジア，印度等の資源開発と鉱石等の運搬用船の建造の促進，港湾等関連設備の整備を強化する．(4) 電源開発を促進する 特に原子力応用に力を注ぐ．(5) 労資の協調等のスローガンを掲げて打開しようと絶大な努力を払いつつある．然しながら，これ等の目的を完遂するものは強固な組織力と技術的の熱意との外にはないのである．その技術的方面の基幹として強い組織力を発揮し，進歩の原動力となる日本鉄鋼協会の使命たるや益々重大で更に飛躍的の活動が要望されるのである．

本協会の業績についてはしばしば会誌の巻頭言で述べられているので喋々を要しない．その成果は「鉄と鋼」の内容の著しい充実，「熱経済技術要覧」或いは「鋼の熱処理—基礎と作業標準」の発行，共同研究部会の活動，春秋2回の講演大会の盛況等で明らかである．また維持会員，正会員等の多大の後援により終戦後の最も困難なる時期を突破する事を得，会の経済内容も著しく健全となり，逐年規模の拡大，新規事業の遂行を可能ならしめる等益々発展しつつある．なお近くは八幡製鉄株式会社前社長渡辺義介氏の記念資金として 1000 万円，および特殊製鋼株式会社社長石原米太郎氏より研究資金として 1000 万円の寄贈を受け，その運営活動が開始せられんとしている．

本協会も創立以来，半世紀の足蹟を印し，近く 50 周年を迎え様としている．この 50 年の歩みは貴重である．これを記念して，本協会にふさわしい有意義な記念事業を行う事を望まない人があるであろうか．

50 周年の記念事業として，その内容の如何にもよるが，本協会に最も有意義な記念事業を遂行するためには，今日より計画することが決して早きに失するとは思われない．茲に私は交友諸外国の鉄鋼関係の学術および技術方面の権威者を勧誘し，できることなら招待して国際的の講演大会を開き同時に研究会を開くことを提唱する．

---

* 本会副会長，日本特殊鋼株式会社常務取締役

憶い起せば 1951 年米国デトロイト市において開催された ASM の "First Metallurgical Congress" においてわが国の代表団は相当の成果を挙げた．すなわち諸国の学者，技術者から多数の論文が提出されたが，その内，優秀なものが採択せられ，同大会にて発表されたのである．それ等の論文中，日本の鉄鋼に関する論文のみで7論文に達した．しかも非常に優秀であるとの好評を得ておるとのことを当時 AMS の有力者から直接聞くことを得たが，これはわが国鉄鋼関係の学術技術が決して海外のそれに伍して行けないものではないことを明らかに示したものと言える．最近会誌に掲載の論文が海外で注目せられつつあり，先年から海外への紹介のため発行せられている "Tetsu-to-Hagane Abstracts" が多大の好評を博していることは益々わが国の学術技術が海外において認識せられていることを示すものである．

茲において，海外の権威者と一堂に会し，胸襟を開いて学術技術を語り，特にわが国製鉄鋼設備並びに技術に関し研究討議する機会を持つことは特に有意義であると信ずるのである．かかる企を実行することはわが国においては決して容易なことではないことは言う迄もないが，最も有意義な時期を目標とし組織の力と熱意を結集したならば決して不可能ではないことを断言して憚らない．今より 50 周年を目指し，5カ年の歳月をかけ，熱意を以て推進したならば，必らず成果を挙げ得ると思う．依つて「日本鉄鋼協会 50 周年記念事業として，国際的講演大会を開催する」ことを提唱するのである．

この企を成果あらしめるため学者，技術者は更に数歩踏み出し一丸となつて切瑳琢磨，創意工夫を発揮し，協力してわが国独特の技術を生長せしめて，"わが国は技術導入にのみ汲々として先進国の後塵を拝するのみ" との悪評を返上する機会とするのが念願である．